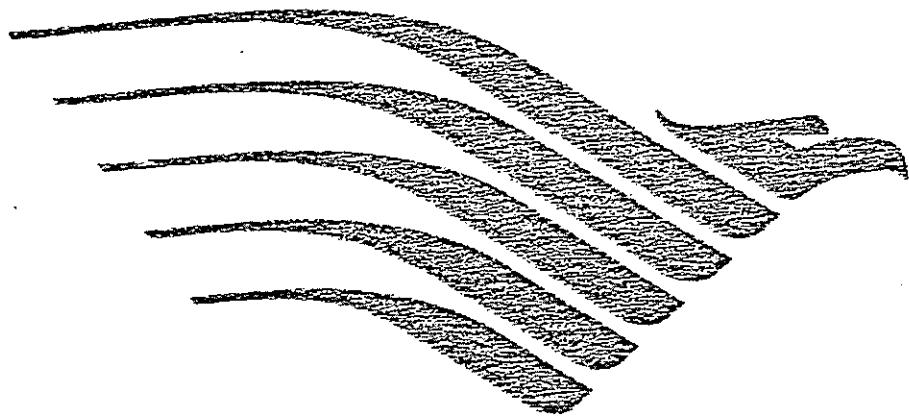


バリ島・ボロブドゥル遺跡
シンガポールの旅



昭和62年1月6日～13日

寺 前 信 次

バリ島・ボロブドゥル遺跡・シンガポールの旅 目次

はしがき	1
関係部隊行動図	2
1月6日	3
インドネシアへ	3
インドネシアの概要	4
インドネシア地図	6
ジャカルタ	8
1月7日	9
デンパサール（バリ島の首都）	9
バリ島の概要	9
バリ島地図	9
バロン・ダンス観賞	10
タンバクシリン村（沐浴場）	11
バトゥール山頂	12
ベドゥル村（象の洞窟）	13
ケチャック・ダンス	13
1月8日	14
朝市	15
亀の島とサンゴ礁	15
市場（商店街）	15
1月9日	16
ジョクジャカルタの概要	17
ボロブドゥル遺跡	17
プランバナン寺院・・・ホテル	17
1月10日	19
シンガポールへ	21
シンガポールの概要	21
1月11日	22
1月12日	23
あとがき	24
	25

表紙のマークはガルーダ・インドネシア航空機のマーク

はしがき

昨年は胃潰瘍並びに白内障の手術の為に入院すること2回に及び、加えて高血圧症と難聴による通院が3ヵ月等、過去の我が人生の中で最悪最低の歳であった。

本年は楽しんで以て憂いを忘れ、楽しんで然る後に笑い、楽しみは自らに存するのだと勝手な理屈を付け、楽しむ所をインドネシアのバリ島・ボロブドゥル仏教遺跡と、シンガポールの旅路を選んだ。

昭和15年より私が北支に赴任して弾丸雨飛の中を転戦した部隊が、昭和19年2月頃から南海の孤島に転進し、悲哉、軍旗を奉焼して大半の将兵が玉碎した地が現在のインドネシア領である。即ちニューギニア本島西北端近くのビアク、ヌンホル島一帯である。マッカーサーが比島奪還の戦略要地として占領を下命した此の島嶼の戦闘を想起する時、血の一滴までも捧げ、力尽きて花吹雪のように壮絶に散った勇士の姿が、我が胸中に切々な思いで沸き返るのである。

又、私が最後に奉職して將に死闘の連続、屍を踏み越えて戦った友の屍も拾えず、涙をこらえて矛を収めたビルマの部隊も、大東亜戦争の開戦前にパラオ群島に終結。開戦直後には、真先に比島はミンダナオ島のダバオに敵前上陸して掃討戦を終え、翌昭和17年1月上旬、ボルネオ島（現インドネシア領）東北部のタラカン島に奇襲上陸して油田地帯を占領、同月下旬に同島東部のパリクパパンを、2月上旬に同島南部のパンジェルマシンを攻略したのであった。更に3月上旬からジャワ攻略戦を開始。スラバヤ西部から逐次上陸して不眠不休の追撃戦に移行し、ジョクジャカルターチャチャップーバンドンージャカルタ（当時のバタビヤ）を占領し、オランダ軍を降伏せしめたのである。その後3月末にジャワ島を出発、シンガポールを経てビルマ戦に参加した彼の有名な阪口兵团の八艘飛びの勇躍の地が、インドネシア領だ。

このような戦闘経過は、前記両部隊の将兵から折りに振れて耳にしていた関係から、自然にインドネシアの魅力にひかれ、生のある間に訪れたいと感じていた点も、ツアーパーに参加した大きな理由の一つであった。

インドネシアは私自身は戦時中、直接に身を曝した関係の地ではないものの、間接的に深い繋がりのある国だ。然し乍ら、これらは戦争という悲惨なことを通じてであり、今回の旅を通じて平和ボケすることなく、平和を希求したい次第である。

シンガポールは昭和19年10月ビルマ赴任の命を受け、福岡の雁の巣飛行場より軽爆撃機の改造機に搭乗し、敵の制空・制海権下を死を決して単機で飛び、累卵の危き中をチャンギー軍用基地に降りた想い出は、明瞭に我が脳裏に刻まれている。ビルマの首都ラグーン行の飛行機を待った約3週間、シンガポールに滞在して戦塵前の命を洗濯したものだ。此の地の防空司令官であった陸士恩師の伊藤加一殿（死亡）や、初年兵教育から師団經理部幹候生教育を通じての教え子（15年徵集）寺岡主計中尉（ビルマ方面軍連絡所長）にも再会し、随分御世話になった懷古の地で、天国の感がしたものである。

過去の深い想い出を追って旅を続けた私は、病上がりながら旅魂の病は膏肓に入り、心中は旅雁のように止まることを知らない。我が人生は旅客だと悟り始めて十数年、我が分を知って満足する者は、精神的に富者と同様だ（足るを知る者は富む）とさすらいに自己満足し、犬馬の老いるように無能のまま老いることを忌み嫌い、去年一年間の空洞を埋めんものと、1月6日成田をあとにした。

十万個の脳細胞が毎日喪失していくと云われ、これを防止する方策は無いものの、旅行の楽しみを再び味わい、何がしの刺激を与えたいと例に漏れず、価値のない紀行文を行なうも継り、アルバムの説明用にでもしたいものである。

関係 部隊行動図



1月6日

インドネシアへ

寒入りの今日の午後、赤道を通過して熱帯を訪れる我々に送られた錢別は、東京で見る積雪であった。不忍池畔のホテルの6階から眺望する一面の銀世界は、飛行機の発着に影響を及ぼさないかと敏感に脳を刺激して、自然に指先がテレビのスイッチへと動いた。天気予報は次第に回復すると伝え、安堵しながら美しい上野の山の冬景色を堪能し、湖上に翼を休める遠来の水鳥も久しぶりに故郷を思い浮かべているだろうと感じつつ、浪漫回帰への魅惑が一段と倍加した。

京成上野を7時半に発ち、都塵を清めたような太陽に輝く純白の沿道に、漠然と眼を移しながら、旧暦以来、1ヶ月ぶりに孫達との再会を果たした昨夕の微笑ましい光景を想見していた。玩具を買い求め、与えてやる位の意志の疎通しかない幼い孫達だが、好み爺と印象付けただろうか。成年に達するまで寿命があるや否や覚束無い私にとっては、すくすくと順調に成育して欲しいと願うだけである。

成田空港に到着してみると、我々一行は僅か五名に過ぎず、年末年始休暇を利用した海外旅行組の大波は過ぎ去り、最も閑散な時期を選んだ事は正解のようだ。旅行社からは添乗員の同行はなく、年の性か海外旅行の経験年数からか、五名の代表を依頼された。

11・00発のガルーダ・インドネシア航空G A-873便は定刻に離陸し、乗客は日本人ばかりであった。

バリ島の首都デンパサールまでの所要時間は、乗り継ぎ時間を含めて10時間だ。ハイよりも長く、シドニーに匹敵する長時間は退屈するだろう。乗客は半分程度にすぎず、ベルト・サインが消えて早速四つの座席を占領し、病氣上がりの体を悠々と横たえることが叶えられたのは、何より幸いであった。

離陸した4時間30分、書面に記載したフライト・インホメーションが前の座席から送られてきた。高度、機種、フライトNO、機長・パサーの氏名、ジャカルタまでの飛行時間(7・30時間)、速度、機内温度(25度)、機外温度(42度)、東京の温度(11度)、マニラ通過時間(日本時間16・16)、赤道通過時間(ボルネオ中部附近、17・17)、ジャカルタ到着日本時間18・30)等と、詳しく書かれていた。

インホメーションを見て窓際の座席に移動して比島の各島嶼を瞰下すると、五官が一気に目覚めたような美しいサンゴ礁や、星の数ほどもある島々が展開している。此の景観から比島の政治経済の難しさが瞭然と窺えるのであった。

とっくにレイティ島は過ぎ去っているだろうが、陸士勤務時代の校長で、レイティ島の師団長として決戦出陣し、戦死された牧野將軍の風貌が彷彿として脳裏に浮かんだ。後日ビルマに出征した私にとっては、特に強烈な印象を与えたものである。

座席のポケットに備付けてある地図をひらき、前記した坂口兵団戦士諸兄の、開戦当初に於ける壮士參として翳らない夢の跡をと、鷹の眼のように島嶼の地形と対照した。日本は今は真冬とはいえ機外温度が42度である。激しい戦闘に加える炎熱との戦いにも耐え抜いた、緒戦の意気が肌に感じてくるようであった。

渺々とした大海原の中を飛行して5時間が経過したころから、大きな陸地が続いていた。地図から判読するとボルネオだ。赤道通過時間が日本時間の17・17の予定(時差2時間)であり、スチワデスは赤道通過の証明書を手渡しながら歩いてきた。赤道通過は南米・オーストラリア、ニージーランドに続いて三回目だが、エベレスト観光やイスラエル巡礼、北極通過の証明書と比較すると、実に小さく貧弱なものだ。

搭乗機が海岸線の上空に差し掛かると、ピンク色あり、淡赤色あり、淡青色あり、これ以上の美観があるかと思えるサンゴ礁の色彩は、形容の辞も知らず、独特の自然美を緋碧の海に描いていた。海面は平和の絵を表現し、燐然とした空には点々と綿雲が浮び、入道雲も稀に遠望されて、赤道下の空間は和やかな天国である。これらの関心は、関係両部隊との忘れられない深い繋がりと強烈な因縁だと、肺臍の底を衝くようであつた。

航空図はインドネシア国の領土を明瞭に描き、東西に長く5000キロにも跨つてゐることは、驚くばかりだ。第二次大戦頃の此の地に三つの方面軍が配置された事は、領土の広大さを表わしている。

インドネシア航空路線に眼を注ぐと、北支戦線で在籍した部隊がニューギニア西部に転進し、清水連隊長以下の主力部隊が兵火も空しく玉砕したが、師団の主戦場となつたビアク島へも、バリ島から定期便が飛んでいる。出来うれば戦友の靈を弔うために訪れたいものである。

ビルマの白骨戦場といわれた殺戮の死戦場と共に、激戦場と騒がれたニューギニアの西半分はインドネシア領であり、ジャワ島からは左程遠くない。一世を風靡した軍歌で有名なラバウルも亦遠距離ではなく、今次のインドネシア紀行がニューギニア旅行への夢の種子を播いたてしまった。

インドネシアの概要

インドネシアの紀行文を記述する前に、歴史等を若干記載する。

(先史時代) ジャワのソロ川の流域で直立猿人の化石が発見されたことは、インドネシアが古代人類の歴史研究に重要な地帯であることを語るものである。直立猿人は必ずしも人類の直祖でなく、その傍系であることは容認されているが、ソロ川の流域から洪積世末期の化石人類が発見され、搬出された遺物とともに旧石器時代文化が、当地に広まっていたことを物語っている。

(歴史時代) インドネシアの歴史時代は、スマトラおよびジャワから始まる。地味肥沃で産物が豊かであったため、インドや中国の商人が紀元前からこの両島を訪れるようになった。特にインドとの文化交流によるヒンズー教や仏教が伝えられたため、ジャワやスマトラの土着権力者たちは国家形成の理念を教えられ、相次いで王国を建設した。なかでも七世紀半ば頃、南スマトラに勃興したシュリービジャヤは、中国の史書にも室利仏逝などと書かれ、仏教文化の繁栄で知られた。同じころ中部ジャワにはボロブドゥルその他の仏教遺跡で有名なシャイレンドラが栄えた。

13世紀以後、シュリービジャヤは衰え、東部ジャワでは、12世紀に栄えたクディリに代わってシンガサリが栄えた。さらにシンガサリの王族の一人が13世紀に建設したマジャパイトは、14世紀半ばに最盛期に達し、ジャワの大半とバリ島を支配しただけでなく、スマトラ、ボルネオ沿岸、スラウェシ南部などにも勢力を及ぼした。しかし

インド文化の色彩を帯びた王国はこれが最後であり、代わってイスラム諸王国が発展した。

もともとイスラム教徒であるアラブ商人などは、すでにこれより数世紀以前からインドネシアに来航していたが、彼等は殆ど布教には貢献しなかった。ところが、13世紀末にインド西北岸のグジャラート地方の商人が来るようになって、初めてヒンズーからイスラムへの改宗が盛んに行われるようになった。

即ち彼等がもたらしたインド産の綿布はインドネシア各地での必需品であり、利潤の多い香料貿易の代価として最も重要であった。彼等は取引や航海についての卓越した知識によって、マレー半島やジャワ北岸などの諸王国で重んじられ、高い官位に就く者もあり、また王室と姻戚関係を結ぶことによって改宗を促した。貿易の利潤により、これらの諸国が急速に富強となったことは言うまでもなく、なかでもマラッカ港の繁栄は周辺に比を見ないほどであった。

さらに当時のヨーロッパにおける十字軍の活動やポルトガルのインド進出は、これに対抗する形でのイスラム教布教を一層促進し、およそ2世紀の間に、西イリオントを除くインドネシアのほぼ全域から比国南部にまで教化の波は及んだ。其の結果は現在にも続き、イスラム教諸国のうちで、インドネシアの信徒数は最も多い、中近東全体のイスラム教徒数に匹敵する。またインドネシア全人口のうち約90パーセントはイスラム教徒となつた。

15世紀末以来ヨーロッパ諸国は、史上空前の大航海時代に入っていた。16世紀に入ると、喜望峰回りのインド航路を開拓したポルトガル船と、新大陸経由の航路をとったスペイン船とが、香料貿易の争奪をめぐって死闘を繰り広げることになる。

ポルトガル人のマラッカ到着は1512年であり、スペイン人はやや遅れて21年に到着した。当時ヨーロッパにおいて宗主国スペインの圧政に苦しんでいたオランダは、68年以来80年にわたる独立戦争によってスペインに抵抗すると共に、東洋進出を企て、ド・ハウトマンの艦隊が96年にインドネシアに初めて到着し、急速に地歩を固めた。

イギリス船の東洋派遣はこれよりも早く91年に行われたが、実際の貿易活動においてやや遅れをとり、1600年に設立されたイギリス東インド会社も、その2年後に設立されたオランダ東インド会社に比して、資本や会社組織において劣っていた。

東南アジア貿易を巡る争いは、スペイン、ポルトガルに代わってこれら二国が主役となったが、19年のバタビア（もとのスンダ・カラバ、のちのジャカルタ）獲得により、オランダの優位は決定的となり、イギリス勢力の拠点を一掃した23年のアンボン島事件以後は、マラッカの制海権もオランダの手に落ち、インドネシアで最初のオランダ植民地となった。こうしてジャワの土着王国は次第にオランダの武力の下に屈していく、遂にチモール（ポルトガル領）、ボルネオの一部、フィリピン（スペイン領、のちアメリカ領）を除き、インドネシアの大半はオランダの統治下におかれたのである。

（民族主義運動）350年を越えるオランダの支配は、インドネシアに民族開放の指導にあたるべき民族資本家の成長する余地を与えなかった。しかし19世紀後半ころから、微弱ながら文化的な活動を目指す種族的色彩の強い種々の運動が起った。

1908年のストモによるブディ・ウートモ党が其の代表的なものであった。その後イスラム教徒によるサリカット・イスラムの運動がインドネシア全土にわたる運動とし

ておこり、宗教を通じて種族を乗り越えた大きな統一的力を示した。此の運動がやがて政治的に急進化し、20年にインドネシア共産党を生んだ。共産党は26年、労働組合の統一戦線として東インド労働組合協議会の結成、さらに共産党以下12の政党、労働組合を集めた反帝統一戦線の結成に成功した。しかし26～27年の全国的な武装決起のあとで非合法化された。

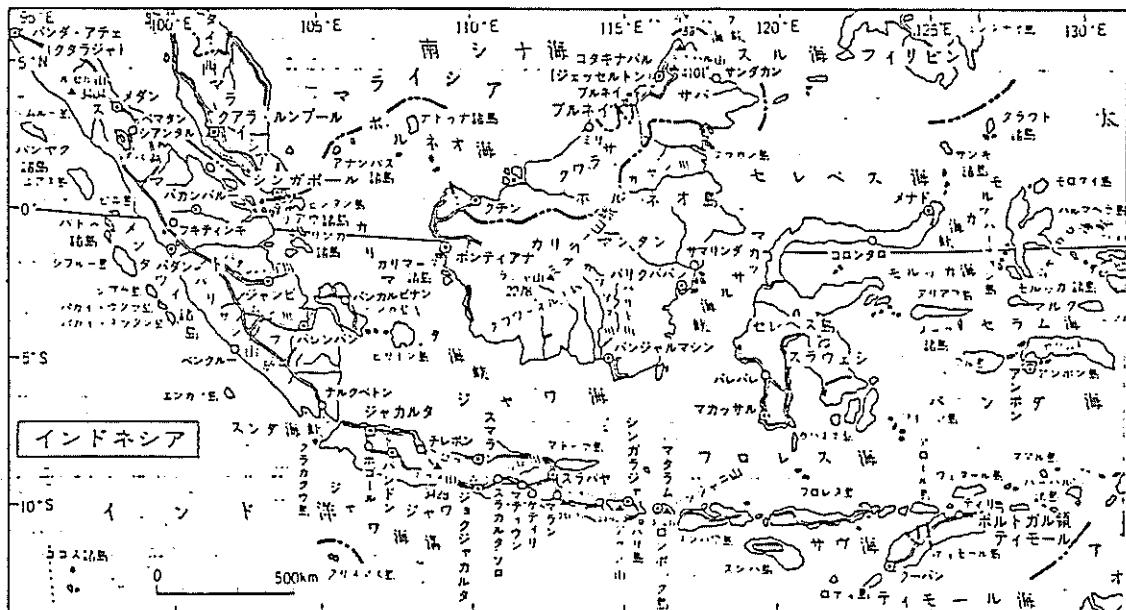
これに代わって27年に結成されたインドネシア国民党が指導権を握り、民族主義的非協調を唱え、大いに勢力を伸張したが、これも31年には早くも解散を命ぜられ、運動は次第に後退し、単に自治要求にとどまる大インドネシア党に席を譲った。

しかし自治の一点では広範な大衆を結集し、39年には各種政党、労農団体を統一したインドネシア人民会議が生まれ、普通選挙による完全議会の獲得を正面に掲げた。

第二次世界大戦が1939年に勃発し、オランダ本国がドイツに征服されたあとでさえ、オランダの亡命政府はインドネシア民族主義者たちの要求に対して殆ど理解を示さなかったので、民族主義者の一部には日本のインドネシア進攻を期待する動きも生じた。

1942年初頭に日本軍がバタビアに進入すると、インドネシア人は、これを恰も解放者であるかのように迎えた。だが以後2年半に及ぶ苛酷な軍政の結果、インドネシア人は、日本が彼等に独立を与える意志の無い事を看破するにいたった。そのうえ戦争末期の人員や食糧の散発は、インドネシア社会を極度の窮乏に追いやり、遂に日本人を敵視するようになった。義勇軍の訓練を受けていたジャワ青年のなかには反乱を企てた者もあったが失敗に終わり、日本軍から苛酷な弾圧をこうむった。

このような情勢の中で、戦前の民族主義運動の指導者の立場は微妙であった。スカルノやハッタのように、日本に協力したほうが独立を達成しやすいという計算のもとに、日本軍政の官職に就く者もあれば、あくまで西欧式民主主義を信じて日本軍に抵抗し、地下に潜入して活動する者もあった。敗戦が間近に迫ったとき、日本は漸くインドネシア人指導者に独立の準備を進めるよう勧告した。



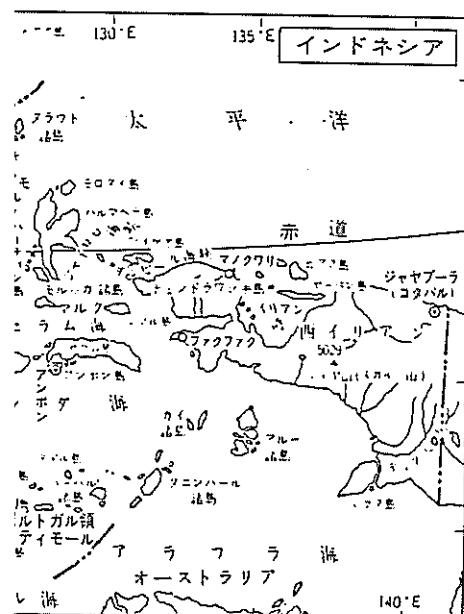
(独立) 1945年8月15日に日本が無条件降伏し、軍政最高首脳部が未だ態度を決めかねている間に、インドネシアの若い民族指導者たちはスカルノとハッタを説き、ついに8月17日未明、インドネシアの独立を宣言させた。その一週間後に共和国政体を規定した憲法が公布された。

ドイツの支配から解放されたばかりのオランダは、インドネシアとの新しい「対等のパートナーシップ」を求める意見は強かったが、独立を認めようとする気持はなかった。その後4年間に渡って、オランダは統治権を再び獲得しようとして説得と交渉を試みた。二度にわたる軍事行動はその現われと言える。しかし結局、国連の調停委員会の指導、アメリカの外交上の圧力、さらにオランダのかたくなな植民地への執着に対する全世界の非難に屈し、1949年12月27日、独立戦争を勝ち抜いたインドネシア連邦共和国に主権を委譲した。

この連邦共和国は、名目的には国家連合（オランダとインドネシアの連合）という形で、オランダに結び付くものであった。12月16日、スカルノが大統領に選出され、ハッタが初代首相に任命された。しかし連邦制形態は、オランダの都合で推し進めたものであったため、直ちに崩壊し、50年8月17日、中央集権の統一インドネシア共和国が取って代わった。

1949年協定で未解決のまま残された西イリヤン（オランダ領ニューギニア）の帰属問題は、後まで禍根を残すものとなった。インドネシアはオランダが引き続き西イリヤンを統治していることに反発して、54年、オランダとの国家連合を正式に解消し、57年、残留オランダ人をすべて追放、その資産を没収し、60年には国交を断絶した。

結局61年、オランダはスカルノの執拗な外交・軍事戦術に屈して、63年まで西イリヤンを国連に暫定的に移管する事に同意した。西イリヤン住民が自決権に基づく住民投票を69年に行うという条件付きで、63年、インドネシアに移管された。69年の住民投票の結果、西イリヤンはインドネシアに帰属する事が最終的に決定された。



1966年10月、ジャカルタで顔を合わせた新・旧の指導者 大統領就任数ヶ月前のスカルノ（左）と軍の実力者スハルト（1968年3月大統領就任）

1963年5月、スカルノは終身大統領に就任し独裁体制を樹立した。対外的には西イリアン開放戦、マレイシアとの対決、国連脱退などを通じてソ連、中国との関係を強化し、内政面では民族主義、宗教、共産主義を三位一体とするナサユムのもとに容共路線を歩み、国軍と共産党との対立、経済の破壊と混乱を生み出した。

共産党は空軍を中心に国軍全体の支配をめざし、遂に65年9月30日深夜、インドネシアの左傾化をめざす共産党員、軍人による9・30事件と呼ばれるクーデタがひき起こされ、陸軍大臣が殺害された。

これに対し、インドネシア共産党の解体、閣内からの共産分子の追放、物価の引き下げの三大要求を掲げた広い民衆運動がおこり、またスワルト（1912～）陸軍少将ら国軍の急速な対応により、クーデタは失敗した。

そして経済混乱、汚職、腐敗の政権という非難の中で、スカルノによる旧体制が倒れた。旧体制派の指導者はスカルノに示されたように、オランダ植民地時代に育成された貴族出身の知的エリート層を代表しているのに対し、スワルトは1942年～45年にかけての日本軍政下で育成された、平民出身の国軍幹部層を代表している。

スワルトは、66年3月スカルノより大統領権限を譲り受けて大統領代行となり、以来、一步一步スカルノら旧支配勢力を追い詰め、68年3月、第二代大統領に就任した。大統領就任後は国軍内部から反体制勢力を追いだし、69年の軍制改革により陸・海・空三軍の最高司令官、スハルトに権力を集中する新体制を確立し、政治的安定の確保をめざし、共産党は非合法化されたのである。

日本との間に1958年4月、平和条約が発効して国交が樹立され、賠償2億2、308万ドル、経済協力4億ドルであった。

ジャカルタ

飛行機はジャワ湾を通過し、陶然として心労を忘れている間に、アナウンスはジャカルタのスカルノ空港到着10分前を告げた。

鷗程万里の広大な海原を渡り、眼下は天然の富を生む沃野千里の田園である。雨期の性か河川は満溢の水をたたえ、カラフルな家屋の屋根瓦と、樹木の緑の中にヤシの木が聳える光景は、赤道直下を感じさせてくれた。

現地時間16・45着。空港ターミナルの各搭乗ゲートは、平安時代に貴婦人のかぶった、尖がり帽子のような赤色の屋根をのせ、建物を囲う周囲の壁はなく、何もない空間である。強く南国を表現しているような特異な建築様式は、他では見慣れない満点の情緒であり、高温多湿を避ける効果は抜群だ。光線状に各ゲートと連絡する廊下の中心部のターミナルには、インドネシア特産の木彫やジャワ・サラサの店舗が並び、名も知らない鮮やかな紫の花が、華麗に咲いて乗客を熱帯色で歓迎していた。小1時間の給油時間が遅延して、暗闇となった18・45発の国内便に乗り換え、バリ島の州都のデンパサールへと向かった。

ジャカルタの歴史を縹いでみると、16世紀の初め頃から貿易港として開け、ヤシにちなんでスンダ・カラバと呼んだが、1527年頃バンタム王国が占領して王族を封じ、ジャカルタと改称した。外国人はこれをなまってジャカタラ（中国の明代でも此の発音）と呼び、日本ではジャガタラと呼んだのである。16世紀末にオランダ人が来航して商

館を設け、ついで 1619 年、総督クーンが町と城塞を拡大して南洋経路の拠点とし、オランダ民族名にちなんでバタヴィアと改め、1621 年に公称となった。

1945 年、第二次大戦が終了してから独立戦争が起り、インドネシア共和国が独立すると共に其の首都となり、旧名ジャカルタを復活したのである。

ジャワ島西部北岸にある此の町は、上空から眺めたように屈折したチリウン川が市内を貫流し、人口約五百万の東南アジア有数の大都市で、人口の 80% はインドネシア人だが、ヨーロッパ人、インド人、中国人、アラビア人、その他多くの種族を集め、この地域の特色である複数社会の縮図である。

機内座席のポケットにあるパンフレットには、ガルビル広場を中心とした新市街や大統領官邸（旧総督官邸）、議事堂等の写真が掲載しており、明るいヨーロッパ式の市街のようだ。この町の古文書館にはオランダ時代の膨大な資料をそのまま保存し、日本とオランダの関係の史料をさぐる宝庫である。尚、17世紀当時の在留日本人の遺跡として名高いミカエル惣兵衛の墓は、第二次大戦前の日本総領事館の庭に再建されていた筈である。

1月7日

デンパサール（バリ島の首都）

昨夜は一時間遅延の 20・00 にヌグラ・ライ国際空港に着陸し、テラマエサンと片仮名で書いた紙を高く差し上げて、迎えてくれた現地人案内人に誘導され、ホテル・バリビーチに旅の疲れを癒した。

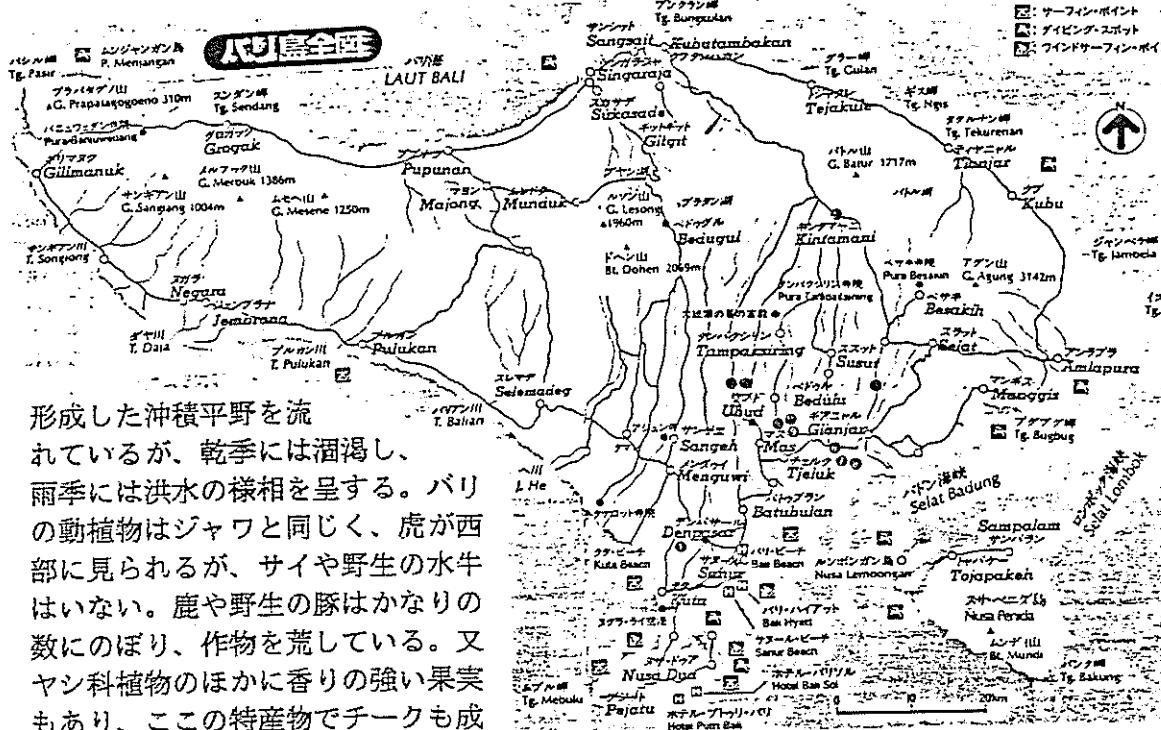
一夜明けて早朝の五時に眼を覚まし、五官一気に開いた感じで旭の昇る前の海浜を歩いた。このような爽快な気分は浜辺独特のもので、数十隻の異様なカヌーが繫留され、ヤシの深い緑が日本の防風林のように海岸線を染め、ほんのりと浮かぶ遠い島々の影に、元気よくさえずる海鳥の声が響き、静かな波の音と調和していた。これを自然回帰の朝というのか、白いオワシスと形容するのか、熱帯の魅惑一杯の素朴な自然は、ひとりでに感動を与えてくれた。

朝食のバイキングは今まで口にしたこともない珍しい果物が盛られ、甘酸の味を大いに堪能しながら、バリ島漫遊の旅の始まりを満喫したのであった。

バリの概要

バリ島はジャワ島の東方に位置する東西 153 キロ、南北 80 キロの島で、インドネシア共和国の一州をなし、8 県に分かれている。各県域はかつての上侯の領域と一致し、旧土侯もしくは其の法定相続人の運営する議会がある。

（自然）島の大半は火山系の山々からなっている。狭い西部地域は人跡まれな未開の高地だ。新しい地質時代に火山活動によって出来た中央高地には、標高 2276 米のバトゥカウ山が聳え、三つの火口湖がある。東部高地には標高 3141 米のアグン山（円錐状火山）があり、火口原にはバトゥル湖をもっている。主要な低地は中央高地の南方に開け、この低地では多くの川が軟らかい火山岩を侵蝕して峡谷をつくり、みずからの



形成した沖積平野を流れているが、乾季には涸渇し、雨季には洪水の様相を呈する。バリの動植物はジャワと同じく、虎が西部に見られるが、サイや野生の水牛はない。鹿や野生の豚はかなりの数にのぼり、作物を荒している。又ヤシ科植物のほかに香りの強い果実もあり、こここの特産物でチークも成育している。

(住民) バリ島には古くからジャワ人が渡来し、ヒンズー（ジャワ文化）をもたらした。特に、16世紀にジャワでイスラム教がヒンズー教をしのぐようになると、貴族、僧侶その他の知識階級がバリ島へ逃れた。それ以来、此の島が唯一のヒンズー教の地となり、古代ジャワ文化の宝庫となった。人口は約250万でデンパサールに26万が集中し、低地の人口密度は非常に高い。バリ島の村落は整然と設計され、各家族はそれぞれ土塀や石垣で囲まれた敷地内に生活している。各村落には寺院や集会場があるが、それらは普通、行事や市（イチ）の行われる広場に面しており、大きな村落には、かっての上侯の屋敷がある。

(宗教) ヒンズー教、とりわけシバ神を信仰するヒンズー教が、仏教やマレー系の祖先祭祀やその他の精霊信仰・呪術信仰と融合して、バリ島民の生活の中心となっている。礼拝所は、アグン山の中腹にある母なる寺院から各屋敷の家祠にいたるまで、無数にある。人々は靈魂の生まれ変わりだと固く信じており、火葬は靈魂を解放するための、楽しく且つ最も神聖な行事とされている。またインドほど顕著ではないにしても、カースト制度は見受けられる。しかし人口の90%以上は最下層のスードラ（階層の名）なので、村民の間に位階の差は殆どないと言ってよい。貴族階級は僧侶、士族、庶民の三つの位階に分かれる。男子は上位のカーストの女性とは結婚できず、また位階に応じて細かい作法があり、話し方も異なっている。各村落は独立した地域社会であり、内部は共通の祖先を崇拝することで結ばれ、さらに村落はいくつかの協同的な部落に分けられている。各部落、また其の下の部落は、寺院の記念祝典、悪霊追放、家畜や作物にかかる年中行事を行うが、これらには宴や踊りが必ず伴い、神や精霊に対して心のこもった供物が捧げられる。

(産業) バリ島の農業はインドネシアのなかで技術的に最も進んでいる。米が主要作物で、丘や山麓斜面一帯に広がる棚田で水稻作が行われ、2年に5回の収穫は可能と言われている。水田以外の耕地ではヤムイモ、サツマイモ、トウモロコシなどの畑作物を栽培し、ココナツや果実も栽培している。バリ島は集約農業を行っているにもかかわらず、増大する人口のために食糧を輸入しなければならない。家畜は豚、ガチョウ、アヒル、鶏などが飼育されており、食肉の加工工場もあって、ジャワとシンガポールに牛肉、肉を輸出している。しかし収入の重要なものは観光収入と工芸品による収入である。

バロンダンス観賞

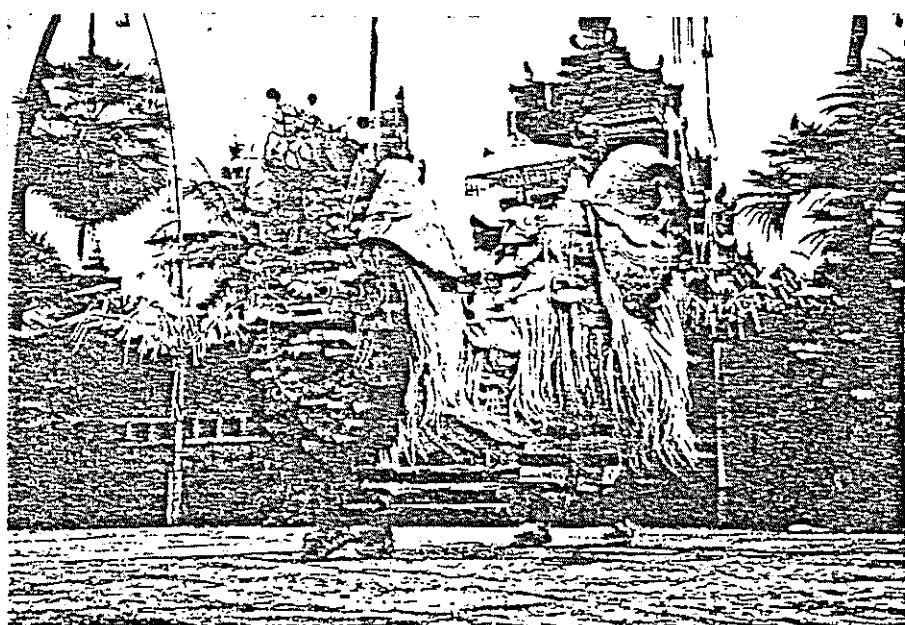
ホテルを08・30に出発して一步郊外にでると、百花繚乱の美しい世界へと移り、旅馴れした白人は自転車を借用して、男女とも半ズボン姿で割安な観光を楽しんでいた。彼等とは正反対に円高の御利益をこうむる日本人は、總てバスの観光で服装も立派だ。

素朴な田園風景が繰り広がるバリ島は、悠久の遠い昔から連綿と続くヒンズー教の信仰が厚く、バリの踊りの身振りにも、魔法のようなヒンズーの意味を表現しているという。私にとってはインド旅行以来のヒンズー教徒との接触である。

イスラム教やキリスト教の大宗教に呑み込まれず、過密な都市化や環境汚染とも隔絶し、昔ながらの純粹さと素朴さが、ヒンズー教文化を守って来たのであろう。

供物を高く頭の上に載せて寺院に運ぶ女性たちを車窓から眺め、バロンダンス場に案内された。素焼煉瓦で囲まれた寺院の一角のような所である。バロンの踊りはガメランというバリ独特の楽器（竹製）を使用した踊りで、バリでは、良い魂と悪い魂とが同時に存在していると信じられている。バロンは良い魂を表わす動物であり、ランダは悪い魂を表わす動物である。

バロンとランダが此の踊りの中で（下写真）、いかに戦っているかを表現し、どちら



も勝利することなく終わり、踊りは七段階に分かれている。

ヒンズー寺院と思われる赤煉瓦で囲った奥の上段から、象のような大きな体を現わしたバロンは、どんぐり眼に鋭い牙、全身が長い毛で覆われた異様な姿である。この怪獣が出現すると観客は一様にどよめき、自然の中に恍惚感と神秘感を与え、神に対するこの島独特の絶対的な信仰を、物語るものだと感じたのである。

ヒンズー教を信奉して特異な風俗と伝統を守る踊りや祭は、神と人間との空間を表現するようで、誠に神秘的な神事だ。四国の三分の一程度の此の島にある寺院の数は、一万とも五万ともいわれ、弘法大師の四国も顔負けである。

村人達の日常生活のリズムを司る宗教の祭礼は、きらびやかな衣裳を着け、花の冠をかむった若い女性たちが、しなやかに身体をくねらせて舞う優雅な姿は、インドのカジュラホで見たヒンズーの踊りに似て、親しみを一段と深くしたのであった。

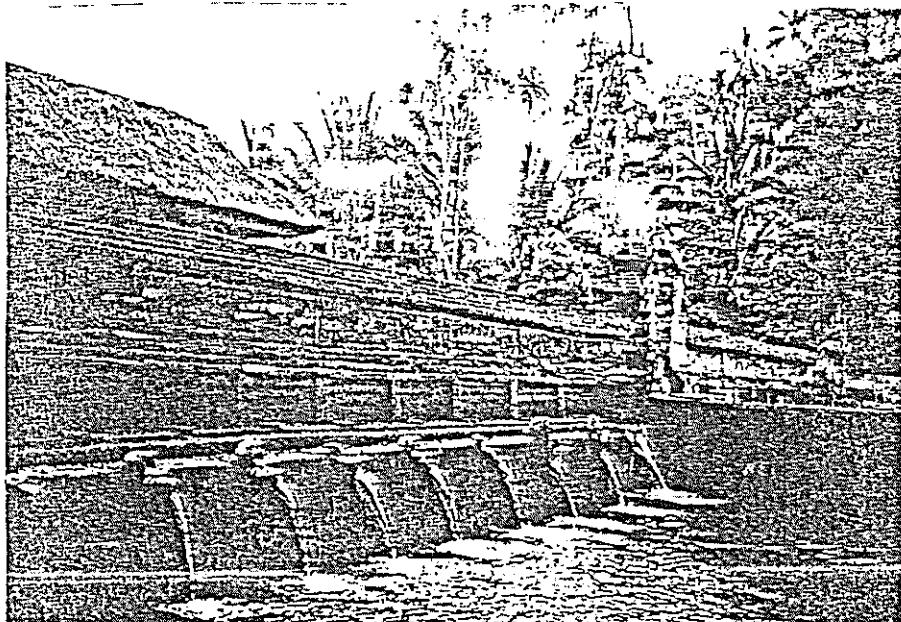
タンパクシリン村（沐浴場）

赤道の南8・5度にあるバリ島の雨季の曇り空を案じながら、バスは次ぎの観光地へと北に進路をとった。先ずタンパクシリン街道上のチュルク村で下車した。銀や金を打つ心地良い響きが聞こえ、室内に入って見ると總てが手仕事である。この村に生まれた子供たちは、小さいころから親の技術を見習いながら、立派な職人になるらしい。一行は五人に過ぎず全員興味がないようであった。

次いでマス村を訪問。バリの代表的な民芸品である木彫で有名な村である。木彫の原材料は黒タンやチークらしく、食指が動く筈だが時期尚早の顔をして去った。

デンパサールの北方約30キロにあるタンパクシリン村は、バリ全島から人々が沐浴に訪れる大沐浴場があり、沐浴場の水は身体を清める「聖なる水」と信じられている。

（下の写真は聖なる水が流れている池の一部）



沐浴場を見下ろす丘の上には大統領の夏の宮殿が建立され、一帯は神秘な雰囲気と聖なる水で身が清められて、自ずから熱さも感じないのであろう。十個以上もある水口から滔々として聖水が池に流れ、此の光景を眺めるだけで斎戒沐浴した感に打たれてしまった。彼のガンジス川の汚い水で沐浴していたペナレスとは、誠に趣を異にしている。釈迦仏を安置した仏殿を始め、建物はすべて草葺屋根で、我々のような異国人でさえも信仰の祈りを捧げたくなる心境に陥り、矢張りバリは天国に近い神秘性がある。

バロン・ダンス場と同型の煉瓦造りの山門を出てみると、この島の人たちばかりでなく多くの外人観光客で賑わい、バリ観光の筆頭の地なのであろうか。沐浴場の丘の上にはレストラン、丘の下には御土産品店が並び、何處も同じ商売熱心である。

バトゥール山頂

バリ島東北部にある島隨一の高原保養地キンタマーニへとバスは登り、標高1・717米のバトゥール山頂に到着した。神秘と伝説に太陽の楽園と宣伝していたバリは、専ら若者向きの海の島とばかり考えていたが、日本と同じく環太平洋の火山の島であった。

頂上にあるレストランで、昼食を味わいながらの雄大な展望は最たるものである。渺々と続く緑の彼方に開いたバツール湖は、曇天の空と同和して、いぶし銀のような湖面を雲のように見せていた。

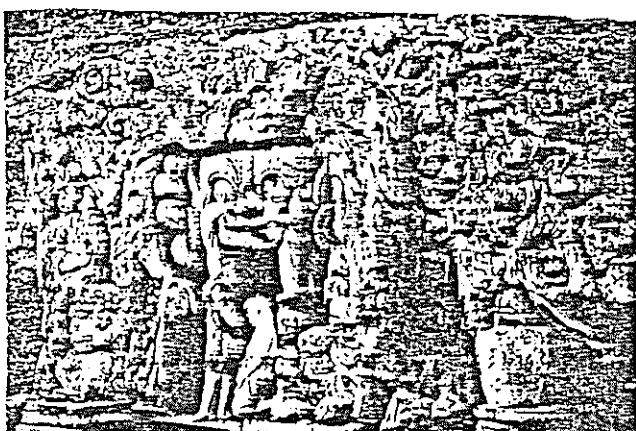
ベドゥル村（象の洞窟）

初期バリ王朝の中心地だった古い村で、象の洞穴（ゴア・ガジャ）という11世紀の遺跡がある。此処は仏教徒の隠遁場として使われていたという洞穴で、内部の見学も許されている。

午前中に訪れたタンパクシリン（沐浴場）と同じ形をした沐浴場が設けられ、池の周囲に幾つかの

草葺の建造物が並んだ寺院である。其の山手の一角に岸壁があり、中央部に洞窟の入口が大きく口を開けている（上の写真）。岸壁にはバロンの彫刻が刻まれ、バリ王朝に相応しい威容が残されていた。洞穴の内部には、ヒンズー教の象徴である象の長い鼻をした仏像や他の石仏が、真っ暗い奥の龕に安置され、お供物や、お花、蠟燭が供えられていた。遺跡の前の道路に面した土産品店街では、ヒンズー寺院の壁に施した彫刻をかたどる木彫の民芸品を、盛んに押し付けていた。

帰路、二耗作三耗作も可能な水田で、野良仕事に忙しい農民の姿を呆然と眺め、芸術の村ウブドに立ち寄った。此の村には200人にも及ぶ画家や彫刻家が集つているという。バリの画家たちはバリ人の生活を素朴なスタイルで描き、水や森、動物、火山の噴煙といった自然を上手に表現し、神と自然と人間の融合した営みを、我々に再認識させたのであった。

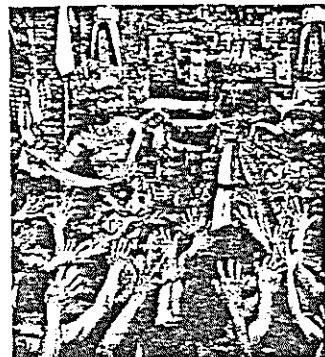


ケチャック・ダンス

バリ島の名所旧跡をめぐり終えて、ホテルに帰還したのは16時だったが、小休止の後、再びケチャック・ダンスを観賞するため足を運んだ。寺院に設けられた会場は、バリの圧巻を満喫したいと集まつた。満員の観光客で盛況を呈していた。



バリにはさまざまな伝統舞踊がある。今朝見学した善靈と惡靈との戦いを表わしたパロン・ダンスや、宮殿の祝賀の舞として古くから伝わるレゴン・ダンスなど、十種類の伝統舞踊をバリ人は伝えている。この中で最も有名なのがケチャック・ダンスであるという（右の写真）。



ヒンズー教の叙事詩ラマヤナ物語りに題材をとった五幕の舞踊劇で、ダイナミックな群舞と、ケチャック、ケチャックと猿の鳴き声に似せた、迫力のある合唱が魅力的だ。

物語りの概要

ラーマはアヨディア王国の王子で、王位継承者であった。しかし父王が繼母と繼母が生んだ子を王子にすると約束していた事を知り、妻のシタと弟のラクサマナを従えて、ダンダカの森に入った。

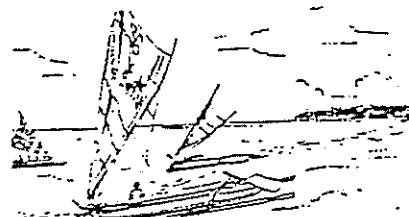
その森で一匹の黄金の鹿に出会い、シタが其れを生け捕りにして欲しいと願ったので、ラーマとラクサマナが此の鹿を追った。無防備のまま一人残されたシタは、アレンカ王国の悪の大王ラワナに捕らえられ、連行されてしまった。

猿王スグリワを司令官にいたいた猿軍に導かれたラーマは、アレンカ王国を攻撃し、結局、ラーマ側の勝利で此の戦いは終了したというストリである。

100人以上の半裸の男達が、薄暗い会場の中心に立てられた「たいまつ」を囲み、五重六重になってケチャック、ケチャックと、猿の鳴き声を真似て合唱する幻想的なダンスである。

猿の鳴き声は主人公のラーマに加勢する猿の軍団を意味し、半裸の男達は完全に猿になりきって陶酔状態となり、神秘的な演劇の迫力は素晴らしく、観賞する者を圧倒したのである。

日本の神話の中で、天の岩戸に隠れられた天照大神を、鷦に時の声を鳴かせ、笛や太鼓で神楽を舞い、何事だと岩戸を開かせた話を想起し、非常に親しみを感じたのである。幻想と神秘の世界を魅了したのち、バリ最高級のレストランでの夕食は、古典舞踊を味わいながら、伊勢海老の御馳走に鼓腹擊壊し、第二日目の夜を迎えたのであった。



1月8日

朝市

昨日は混然とした土俗の響きを楽しんだ強行軍の一日だったが、今日はゆっくりと一日を楽しむ自由行動の日である。

バリの朝は早く市場は午前四時から賑わうと聞き、朝食後、タクシーをチャーターしてデンパサールの市場の見学に出掛けた。デンパサールとは現地語で「市場の北」という意味で、現在では市場は市の中心地となっている。

場所はデンパサールの目抜き通りのカジャマタ通りで、野菜、果物、魚、肉、などの生鮮食品から日用雑貨、神様に供える花など、高価なものでないかぎり何でも揃っており、群衆のひしめきあう市場は歩行も困難である。

聞くところによると、バリの主婦達が気にすることは唐芥子の値段だそうだ。バリ料理には大量にこれが必要とされるから、唐芥子の値上がりは直接家計に影響するという。芥子は寒い国の専売かと判断していたが、熱帯も同じとは一つ博識になつた。

バリの人口250万の一割以上が此の町に集中し、其の台所を賄う場所とすれば当然だろうが、余りの活気に眠気は吹っ飛び、彼等の寸分も惜しまず日参する光景に、釘付けにされてしまった。

亀の島とサンゴ礁

朝市から帰り、ホテルの裏の白砂に足跡を描いて散策した。昨日の早朝に出会った小さな店の主人は、カヌーに乗って往復2時間のサンゴ礁と亀の島見学を執拗に勧めた。料金は一人五千円のことだったが、結局一人三千円に値切り、三人で乗船してエンジンが始動した。後日、新婚さんから一人3ドルにまで値下げしたと聞き、一杯食わされたと憤慨しても後の祭りだった。

亀の島まで小一時間、海水の飛沫を全身に浴びながら突っ走り、前を行く日本人観光客を乗せたカヌーを追い越した。シーズン中の行き来する色彩豊かなカヌーの群れを頭に書き、これこそ、海と太陽の楽園を魅了さすのだろうと感じつつ、亀の島に上陸した。

誰でも亀の島の観光だと聞けば、海の中に沢山の亀が泳いでいる光景を想像し、信用するのが当然だ。然しながら豈図らんや、ただ竹の柵で囲った十坪程度の砂の上に、五、六匹の亀が居るにすぎない。観光ずれをした船頭たちの知恵が我々を上回り、これまた一杯食わされてしまった。

此の離れ小島の小学校建設のために、若者は盛んに募金を懇願していたが、またペテンにかけるのかと疑いの眼を向けていると、今度は小さな子供までも貝殻を両手にのせて、泣き落とし商売の攻撃であった。時間にして10分程度も上陸しただろうか。ほうほうの体でカヌーに引返し帰途についたのである。

途中、水深1米足らずの海中に錨を卸した。ガラスをはめた四角な箱で海底を覗きながら、サンゴの在処を探り、水中に潜って採るのであった。しかし間近で見るサンゴ礁は見られたものではなく、矢張り美観は空から眺めるに過ぎるものはない。

勿論、水深1米では白いサンゴが点々とあるだけで、天敵の鬼ヒトデが巣然と生存し

ていた事は驚きであった。隠れた海の世界も陸上と変わりはなく、「生は寄なり死は帰なり」と教えてているようだ。

市場（商店街）

ホテルのロビーでは若い娘がバナナの茎で、お花や扇子の形をした独特の飾りを作っていた。ホテルの正面から廊下にも飾られ、ヒンズー教のバリ島らしい情緒を味わせていたが、恐らくシバの神前に供える物であろう。

午後1時に市場見学にタクシーの予約を依頼した。タクシーの運転手からフロントの人達、御土産店の売子に至るまで、ある程度の日本語は話すことができる。それだけ日本人観光客が多く、絶対的な必要語として勉強に努めている。日本語に次いで英語だが、これは比較的近距離のオーストラリヤからの客が多い性である。

海岸からデンパサールの市内までの農村では、実りの稻を刈り取る人、牛で田を耕す男、並んで田植えをしている娘達、青々として成育中の青田を手入れする農夫など、日本では想像出来ない田園風景が展開していた。活躍次第では三耗作も可能だが、機械化は殆ど進んでいないものの、裕福なのか建物は考えていた以上に良さそうである。

緑の豊かな並木道は自動車の数は少なく、街の中心部に近づくにつれて、日本の地方都市並みの雑踏状態であった。本日の朝市に訪れた広場の周囲が観光市場に早替わりして、三階建の全部の店舗は御土産で埋められ、我々の眼を引き付けていた。売手の彼等が高い値段で吹っ掛け、これを半値以下に値切る手も覚えて、ショッピングの楽しみを面白く体験した。

インドネシアの1万3000以上もある島の中で、此の島だけがヒンズー教を信奉し、特異な風俗と伝統を守ることに心から愛着を感じ、バリの体臭を肌に残して置きたいと、ヒンズーにちなんだ民芸品を数点買い求めた。

本朝の朝市見学に始まった自由行動の一日はバリの人に習い、ここ独特のゆったりとしたリズムに合わせながら、神々の休日らしく過ごし、明日早朝の出発に備えたのであった。



1月9日

午前3時モーニングコール、4時朝食、5時ホテル出発、デンパサール空港6時30発のガルーダ航空にてジョクジャカルタへと飛び、興味深々だったバリとを離れる運びとなった。僅か3泊に過ぎない滞在だったが実に名残惜しい気がしてならない。

デンパサール空港ターミナルは、観光バリの表玄関だけに素晴らしい構えで、早朝に拘らず全店が扉を開き、外貨獲得の商魂は見上げたものだ。

機内は我々のようにジョクジャカルタからシンガポールに行く客は少なく、専らバリ島のバカンスを楽しみ、其の間のO・Pで、ボロブドゥル遺跡の見学ツアーに参加した人達で満席だ。45分のフライトでインドネシアの京都といわれる、ジョクジャカルタ空港に着陸すると幸にも快晴であり、絶好の遺跡参観の天候に恵まれた。

ジョクジャカルタの概要

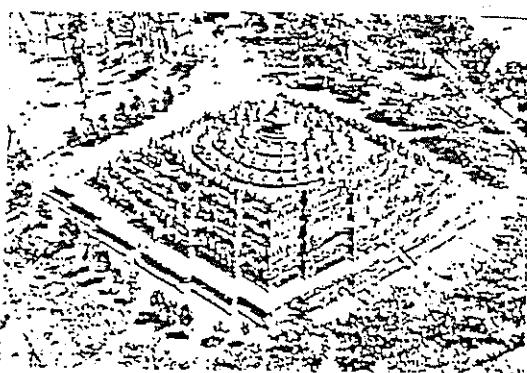
略してジョクジャと呼ばれ、嘗ての仏教とヒンズー教文化の中心地であった歴史的都会である。メラピ火山の南西麓に広がる平野の中にあり、標高は115米である。市街は旧市と新市とに分かれ、旧市には城壁に囲まれた王城がある（2月3日ナルホド・ザ・ワールドで放送）。王城の内部に住む人々は15・000に達し、王の侍従や其の家族が大部分を占め、古式ゆかしい服装を着けているということである。

16世紀以来ジャワの大半を領有したマタラーム朝は、オランダ人勢力の発展に伴い、次第に圧迫され、かつ前後三回の王位継承戦争（1704～08、1719～23、1749～55）による内乱の度にオランダ人の干渉を招いた。1755年の平和条約成立後、オランダ人の調停により王領を折半、新たに一王族を立ててアマンクー・ブウォノ一世と称し、居をジョクジャカルタに定めた。以来同王の子孫が代々引き続いて同地におり、オランダ人の東インド統治権の確立強化に伴い、其の領有地は縮小したが、最後まで自治領として認められ、封建的な体制を維持した。ボロブドゥル仏跡も此の領域内にある。

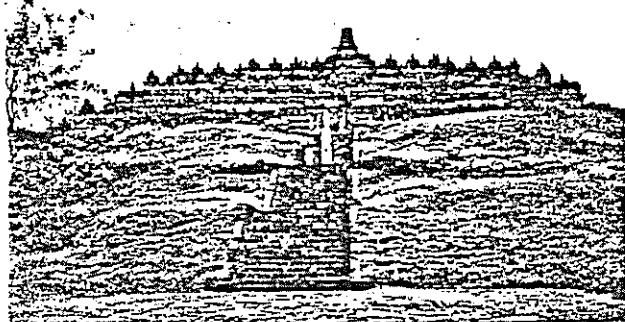
ボロブドゥル遺跡

ボロブドゥル遺跡は1814年に密林の中から発見され、20世紀初頭に一度修復されたが、長年厳しい熱帯の気候に曝されていた為、1960年代には崩壊寸前の状態となった。このためユネスコが此の人類共有の偉大な文化財の救済を、全世界に呼び掛け、1973年以来、国際的な協力による大規模な修復工事が行われ、1983年に建造当時の姿に復元されたのである。（上の写真は全景図）

九年前のインドの仏教遺跡巡礼の旅をしてから、ボロブドゥル遺跡の見学に大きな憧れを抱いていたが、念願が叶えられて漸く実現出来たことは、今次旅行の最大の喜びと感激であった。（日本も協力資金及び建築家を提供し、重要な役割を果たしている）



バスはジョクジャの市街地を通らず一路、市の西方48キロにある遺跡に向かった。仏の慈悲とも思える雨季の晴れ間を走り、8世紀頃に欧洲から渡來したアンドン馬車や人力三輪車の行き通う街道を眺め、市の独立記念塔（独立運動発祥の地）や中国人墓地（本土の墓とは異なる）を通過すると、多数の仏塔が聳える遺跡の影が彼方に見えて来た（上は全景）。その遠景はヤシ林の向こうの海に浮かぶ小島を連想させ、仏跡のもつ靈性によって、幸が生ずるような思いがしたのである。



カンボジアのアンコール・ワットとともに、東南アジアに定着したインド文化の双壁の前に立ち、一礼をして清掃された敷地の砂利を踏み締めて進んだ。凜々しい制服姿のボイスカートやエリート官吏の団体など、この国の次代を担う人達が隊伍を組んで整然と参観に訪れていたが、何かを掘んで帰る事だろう。

約千年もの間、火山灰の中に埋もれ、永い眠りから覚めて蘇った遺跡は、平坦な土地に小高く盛土した丘の上に在り、黒い石で積み上げた遺跡の階段を登ると、恰もピラミットの上から下界を真下に展望するようで、其の名の通り（ボロブドゥルとは丘の上の大伽藍の意味）の雄大さを感じたのである。

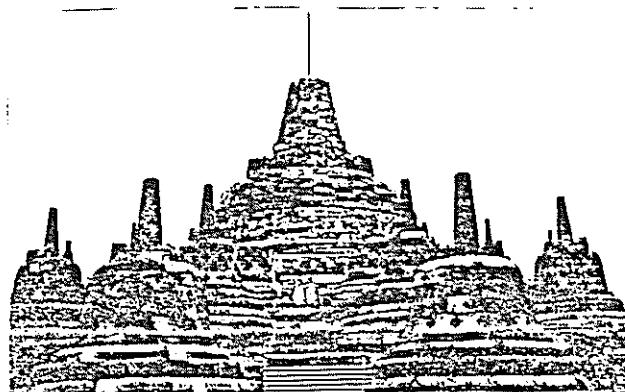
インドネシアの島々には、すでに紀元前からインド文化の影響が及んでいたが、やがて8世紀の前半から10世紀の前半にかけて、中部ジャワ地方一帯に、ヒンズー教と大乗仏教とを基調とした優れた宗教芸術が栄え、多くの寺院建築や神仏の彫像が造られた。その内の幾つかが千有余年の今日まで伝えられ、今こうして私どもに当時を偲ばせているのであった。

建築の様式は、古代インドにおける仏教建築特有の仏塔に、インド文化がジャワに渡来以前から、ジャワ人が祖先を祀るために造っていた、段台状の墳墓の構築様式が加味されたものようである。

一辺約115米の正方形の台を基壇とし、6層の方形段台の上に3層の円形段台を重ねた、合わせて9層のピラミット状建築物である。（17頁写真）最上層の円壇の中心には、巨大な釣鐘状の仏塔が置かれているが、その頂上の先端までは、地上から約24米だといわれている。

基壇の上の4層の方形段台の周辺は、幅2メートルの回廊になっていて、これを右回りしながら次第に上層に登るようになっている。回廊の両側の壁は上下二つの部分からなり、上部には等身大の結跏趺坐した仏像一体を安置した龕（ガン・箱の意）が並び、4層で合計432体を数える

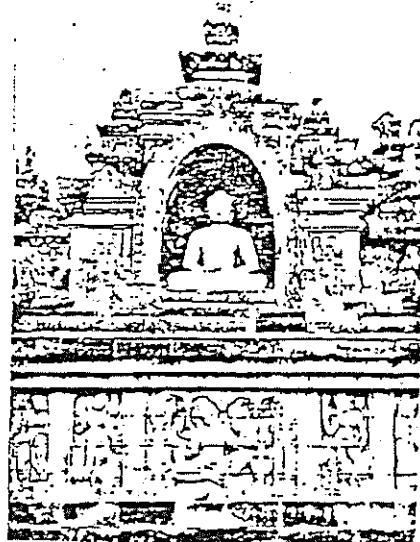
（19頁写真）。また下部には、仏教の教典を絵画的に表現した浮彫の





パネルが、帯状に連ねられている。このような浮彫は合計 1460 面あって、総延長にして約 5 キロに達すると云う（上の左写真）。

一方、上部の 3 層の円壇の周囲には、内部を見透かせるように石を格子状に積んだ、小型の釣鐘状の仏塔 72 基が、中心対称、等間隔に配置され、その内部にも各一体の等身大の仏像が蓮華座の上に結跏趺坐している（右）。



さきの回廊の仏像を合わせ、総数 504 体に達する仏像群は、幾何学的な均齊と、秩序に従った配置がとられているので、この建築は全体として、一種の立体的な曼荼羅を表現したものだと云われている。

また浮彫には、因果応報の理を説いて人間の欲を象徴したもの、人間が仏に近づく世界を象徴したもの等がある。即ち善因善果・悪因悪果のいわゆる業（ごう）を表わし、地獄の彫刻が多いようだ。第一回廊の主壁には種々の譬喻（ヒュ）物語、第二回廊の主壁には善財童子が 53 人の賢者（善知識）を遍歴聴聞して歩いた華嚴經の物語、第三、第四の回廊も其の続きで、特に第三回廊では弥勒菩薩に聴聞した内容を詳しく表わし、第四では普賢菩薩の行願を善財が体得して法界に悟入し、そこで普賢が毘盧遮那（ビルシヤナ）仏の広大無辺な功德を、賛嘆して聞かせたと云う其の教典の結末にまで及んでいる。

上部円壇の目透し格子の仏塔内の仏像は、眼に見える現実の世界から、次第に一切何も見えない「無」の世界へ移って行く状況を象徴していると云われ、これらはとりもなおさず、大乗佛教のいう三界の具象化だとされている。

約一時間の参観であったが、見惚れた仏像や浮彫は、洗練された写実のうちに佛教の理想を造形化しており、佛教美術史上の最高傑作の一つを目前に出来たことは、誠に幸福の至りであった。

プランバナン寺院・・・ホテル

風光明媚なジャワの庭といわれるケドウ盆地を、バスは東に進路をとった。毎年 5 月或は 6 月の満月の夜に、世界中から佛教徒が此のボロブドゥルの仏跡に集り、大祭典が開催されると現地添乗員から聞くに及んで、もう一度振り返り、その夜の光景を想像す

だけでも、偉大なジャワ文化の芳香が漂うようであった。

プランバナン寺院はジョクジャの東方約20キロの位置にあり、ボロブドウル（8世紀後半から9世紀前半と推定）より稍々遅れて建立された、ヒンズー寺院の遺跡で、一瞥したところインドのヒンズー寺院そくりである。

境内には三つの寺院が建っており、その中で最も大きいロロ・ジョングラ

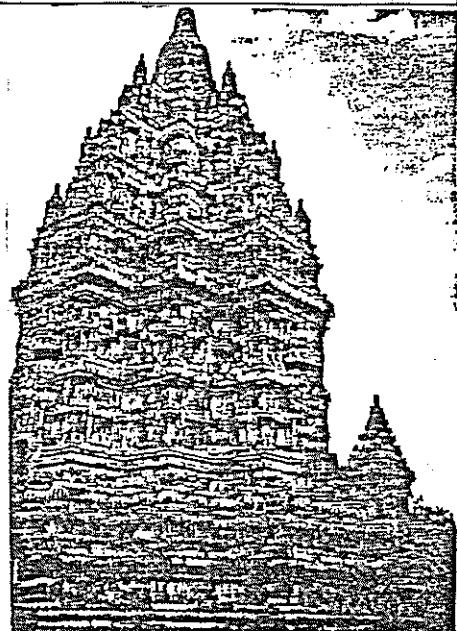
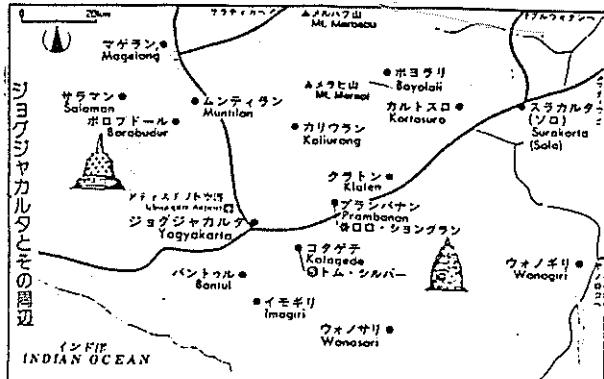
ン寺院の他を睥睨する姿が美しく映えていた。外壁に彫刻されたラマヤナ物語の浮彫は、実に鮮やかなもので、ジャワ美術の初期に突然に出現していくものとは思えず、必ずインド渡来の優れた技術者が関与したのに相違ないと思うのである。

寺院内部に安置された大きな石の仏像は、手足の破壊されたものが多いものの、顔の部分は無傷で仏の尊厳さは内蔵されている。それにしても異教徒による文化財の眼に余る破壊は、古代から洋の東西を問わず行われた点を、遺憾と云わなければならない（右はロロ・ジョングラン寺院）。

ここに没歿するまでの願望の一つを達成して、満足気に帰路についたが、田舎町には立派すぎるレストランに5名が案内されて昼食を終え、金銀細工や牛皮製品、ジャワ更紗の店を覗いた。

現地人添乗員の歌う、日本の昭和初期の流行歌にほんのりとさせられ、穏やかな田園の雰囲気に溶け込みながら、バスに体を預けて市内に向い、クモ・パレスの客となった。このホテルもプール設があり、夕食は、聞く者を悠久の世界へ引き込む舞踊を観賞しながら、古都の味を飽食したの

インドネシア国を訪れて四日が過ぎ、今回の旅の感想を一言で云い表わすことは困難だが、世界の文化、歴史、宗教の根源を、此処の土の靈から学び得たような錯覚さえ覚えるのであった。特に仏教の深遠な思想を彫刻で表現していたボロブドゥル遺跡は、大乗の悟りの生きた教典であり、機会を求めて此の国、この島に再度足を運びたい。



1月10日

シンガポールへ

ジョクジャカルタ空港を08・45に発ち、ジャカルタのチェンカレン国際空港に到着したが、約3時間の待合時間に退屈させられ、そればかりか、空港案内の不備から搭乗券の入手にてんてこ舞いであった。接続時間をもう少し短縮して欲しいものである。

12・15発GA962便にてシンガポールへと向かう。機内は半数にも満たない乗客で、視界の悪い曇天の雲の上を翔び、15・00にチャンギ空港に着陸した。

改造軽爆撃機に搭乗して台北、シーラン、サイゴンに各一泊した後、当時の軍用飛行場であったチャンギ飛行場に降り立つてから、四三年の歳月が経過した。実に人生の忽たること鳥の目を過るが如しである。本当に棲郷病に陥ったように四周を凝視して、記憶を呼び戻すことに懸命であった。然し乍ら、時代の迅速な流れを考えさせるばかりで、高速道路から始まる、視界に映る異常な大発展の模様は、すべてが驚異の眼鏡を掛けなければならなかつた。

彼の時は死を決してビルマ戦線に赴任することであり、今生の別れと想いつつ、真剣な眼で物珍しく戦跡や町並みを見歩き、其の記憶は未だに脳裏に刻まれている。トロリーバスに揺られて華僑の街を散策し、或はブキ・ティマ高地から世界に誇る美港を展望し、また遠く車をとばしてジョホール水道に走り、そのうえ夜の街を闊歩した當時とでは今昔の感がする。

市内の目抜き通りは緑と花に覆われ、白亜の高層建築の林立する谷間も、大公園内の道路を通過しているようである。淡路島ほどの此の島に250万の人が生活し、その富と繁栄の原因は何であろうか。

東南アジアにおける海、空路の中心地という地理的条件に負うところが大であろう。このことは1819年のイギリス東インド会社建設から始まるが、戦後の世界的な観光ブームによる観光開発、ベトナム戦争に伴う長期間にわたる米軍への石油補給、中国と反共国家との間の物資中継などの中継貿易、イギリス軍撤退から海運ブームにのった軍港の活用等、国際政治情勢によって活況を呈したと言ふことが出来る。勿論人口の八割を占める華僑の勤勉によることも忘れてはならない。

本、明日と宿泊するホテルはセンチュリーパーク・セラトンと云い、植物園を含めた大公園の一隅にあり、部屋の外も内も蘭の花が咲き乱れて感じの良い環境であった。

夕食は日本、西洋、インド、スイス、中華料理等の好む食事を召され度しと云う事で、稍々遠いホテル・グランド・セントラルまで、雨の中を散歩かたがた足を運び、イタリア料理に舌鼓を打った。

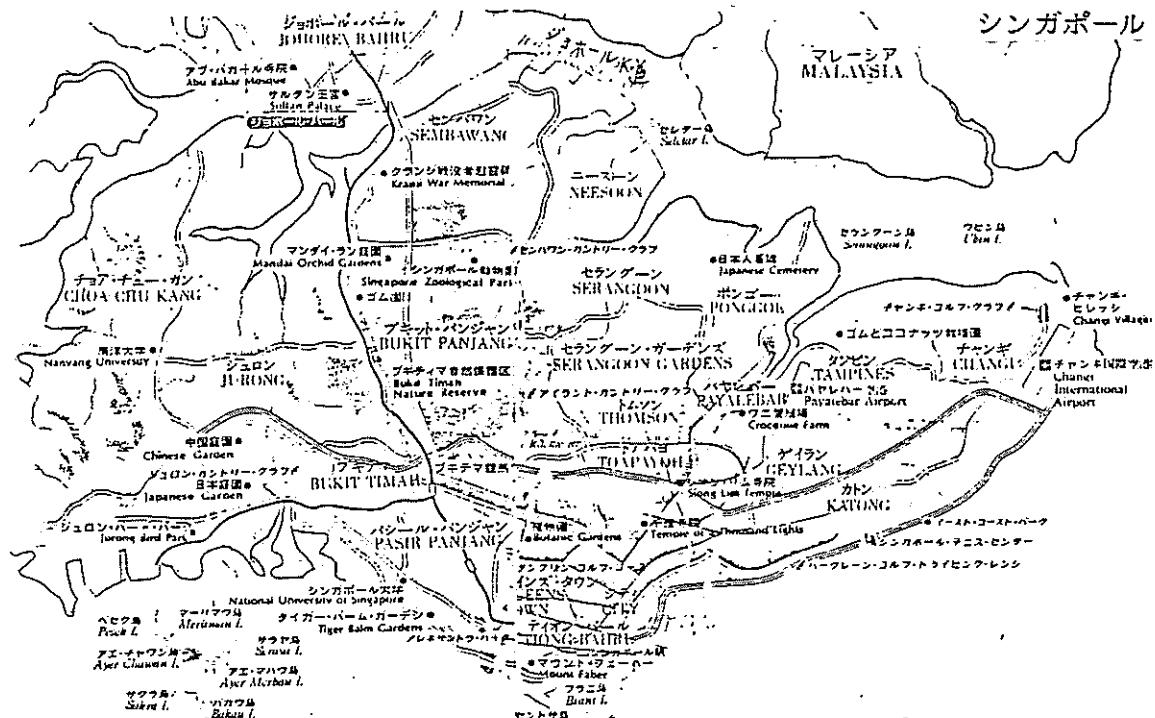
帰路に拾ったタクシーの運転手は何を勘違いしたのか、春節を迎えて煌々と飾られた夜の中華街で我々を下ろしてしまった。赤一色の華人の正月を久し振りに拝見できたことが、せめてもの幸せで、再びタクシーに乗車して第一日を終わつたのであった。



2.シンガポールの花



高層ビルが林立するシンガポール中心部



シンガポールの概要

マレー人の伝説によると、最初にこの地に植民したのは、スマトラのシュリービジャヤ王国の首都バレンバンから来た王子であった。それをシンガ・プラ（サンスクリット語で獅子の町の意）と命名したのは、1025年にシュリービジャヤと、その植民地を急襲したチヨーラ朝の王ラージェンドラコーラ・デーパー一世であつたらしい。

14世紀末頃までのジャワや中国の記録では、ジャワ語のトウマシクという名称のほうが一般的であった。漢書では「島夷志略」に单馬錫（トウマセク）と書かれている。

13～14世紀にはスマトラのシュリービジャヤ王国の要衝であったが、14世紀中頃にはシャムの攻撃を受け、14世紀後半にはジャワのマジャパヒト帝国に征服されたという記録があるが、同世紀末には衰退してマラッカ朝がトゥマシクに取って代わった。しかしその後も引き続き重要な寄港地で、1552年にはフランシスコ・ザビエルも立ち寄っている。

1819年1月28日、イギリス東インド会社のラッフルズが新しい基地を求めて、シンガポールに上陸した。当時この島には中国人、原住民、マレー人など少数の住民しかおらず、オランダ人は住んでいなかった。

ラッフルズは、オランダの監督下にあって此の附近一帯を事実上の支配をしていたアブドゥル・ラーマンが、正式のスルタン（王）ではなかったので、その兄フセインからこの島を買収した（ジョホール土侯国）。

オランダはこれに抗議したが、1824年の英蘭条約でシンガポール島は正式にイギリス領となった。26年にはペナン、マラッカと共に「海峡植民地」を形成し、インドの行政下に含まれたが、67年にはイギリスの直轄植民地となった。

1869年のスエズ運河の開通と、蒸気船の出現によって、シンガポールは繁栄の時代を迎え、マレー半島諸国がイギリス保護領となって経済発展を遂げると、中継港として栄えた。

第一次世界大戦後は、東南アジアにおけるイギリスの軍事基地としての機能が増大した。第二次世界大戦では、1942年から45年まで日本軍に占領され、日本の敗戦までの三年半その支配下におかれた。

第二次世界大戦後のマラヤにおけるイギリスの政治計画は、マレー連合（のちマラヤ連邦）からシンガポールを除外することにあった。それは、シンガポールにおける中国人住民の優越性が、共通の国民意識の形成に人種的な障害となる虞れがあったからだ。即ち、華僑の多いマラヤ連邦のマライ人優先主義に対し、同じく華僑が80%を占めるシンガポールは、政治色のない経済都市にしたい考えからである。

シンガポールは1946年から単独でイギリスの直轄植民地となり、1963年9月、マレーシア連邦が形成されると、シンガポールはこれに参加した。しかし、これに反対する極左分子があり、64年のインドネシアとマレーシアとの軍事的対立ともからんで、政治的に不安定な状態を生んだため、65年8月マレーシア連邦から分離、独立したのである。

1月11日

一日観光の日も降雨のために、映えて見える港湾の景観も美しさを現わさず、観光名所の少ないシンガポールの雨は、恨めしい極みである。

先ず最初にホテルの西隣にある広大な植物園に導かれた。突然一面の緑の中に、白一色の男女二組のお出ましであった。結婚式を終えたウェディング・ドレス姿の中国系のカップルは、早速写真に収まっていた。此の頃から雨も少々上がり始め、ご両人を祝福しているようであった。

シンガポールの国花は蘭（21頁の写真）だが、直接地面に植えたものや、鉢植えの高級なものまで、多種多様の華麗な花を付け、時間を掛けて観賞したいと思つた途端、現地添乗員は園外に誘導したのである。これでは、ただ場所を案内したに過ぎず、全く好感のもてないガイドにぶつかってしまった。

バスは高層ビルのひしめくオーチャード通りを東進した。私が三週間ばかり宿泊した「昭南ホテル」は現在、キャセイ航空ビルとなっている、と添乗員は指を差して説明してくれたが、あのホテルに厄介になった将校達も沢山観光に来ているのであろう。

昭南ホテルの周囲は当時、ヤシの木の生えた静かな高級別荘地であったが、今は繁華街の一部となって繋がり、昔の面影の片鱗さえも残しておらない。

シンガポール川を渡ると直ぐ左にマーライオン公園が見えたが、往時の記憶にはなく、観光名所として新設したものであろう。頭がライオンで体が魚という石像は、デンマークの首都コペンハーゲンの人魚の像にあやかって、造ったのかも知れない。

道路が狭い性か、それともガイドの不熟心からか、車窓から眺めただけで通り過ぎ、海岸線を突っ走った時に、シンガポール駅が見えてきた。チャイナ・タウンの向こうにあった此の駅を後にして、マレー半島を縦断したことも懐かしい想い出だ。待てども久しく航空便はなく、業を煮やしての出発だったが、若かった証拠である。

此のあたり一帯の、変化の少ない環境に感興しているうちに、マウント・フェーバーに到着した。シンガポール本島にある高さ115米の丘で、南に見えるセントサ島とは、ロープウェイで結ばれている。ガイドは早速、明日のあの島へのO・Pツアーやを募集したが、参加の希望者はない。勿論ここも新しく開発したものらしく、子供たちの遊び場所としては絶好の所だろう。ただ、海に浮かぶ島の夜景は素敵だと想像するのみで、ほうほうの体で雨中を引き返した。

次ぎも亦、新しく造ったマウント・フェーバーの西方にある、タイガー・バーム・ガーデンに案内された。華僑の大富豪「胡文虎」が造った魔訶不思議な庭園だ。約一万坪の大庭園内に、奇想天外な動物の彫刻や人形、絵画を始め、仏像を含めた極彩色豊かな地獄図を描いていた。日本の名横綱の栃錦や若乃花の彫刻もでんと据えられ、なかなかの商売人らしいところを發揮している。商売の点ではガイドも負けず劣らず、万金油の注文を勧誘し始めたのには、驚くばかりであった。

この附近一帯の丘より南の洋上を遠望すると、シンガポール随一の多島海が見渡す事が出来る筈だ。昔日、ブキ・ティマ高地(177米)より眺望した彼の景観が彷彿として脳細胞に浮かんだ。今ではブキ・ティマの西方に日本庭園や中国庭園までも設けられ、シンガポール西南岸は名園地区に開発されてしまったそうだ。雨が残念だ。

車は反転した往路を戻り、我々のホテルに近い、オーチャード通りのパレス・レストランで昼食となった。四・五百名も収容できる広東料理店は、シンガポールきっての大きな店の一つということであった。

午後は降り止まない小雨のせいか、日程表の行動をとらず、ガイドは最初からショッピングの案内だ。先ず皮革製品工場に誘導され、ワニやヘビの皮の製造工程を見学し、例の通り即売品売場へと案内された。引き続き日本では珍しいマンゴやパパイヤを原料とした物から、胡麻や海老のセンベイに至るまで、多くの種類を揃えた菓子専門店を訪れたが、此処は日本人観光客で賑わい、手頃な御土産として人気があったようだ。最後は御多分に漏れず、ホテルの向う側にある免税店に立ちより、解散・自由行動となった。

夕食のトロピカーナ・シアター・レストランは、オーチャード通りにある市内最大の高級レストランである。各種民族の踊りが舞台に繰り広げられ、最後のヨーロッパ風のレビューを歓談しながら食べる豪華な広東料理は、最後の晩餐に相応しいものであった。

シンガポールは、何分にも価値のある観光名所・旧跡がある訳もなく、ツアーグループの組まれる都合上からの旅は、旧古の情を新たにする目的が主であり、行動の説明を順を追つて記述した。

1月12日

夕刻の16・30まで自由行動の日である。八日間の旅の体力の限界を考慮して、午前中の行動することに決め、先ずシンガポールのシンボル・マークとなったマーライオン公園に足を向け、その後、時間を掛けてジョホール水道の見学だと我々三名が合意



して、車をチャーターした。

雨中のマーライオン公園で写真を撮り、反転して車がブキ・ティマ通りの坂を登り始めたところ、長い車の渋滞が続いている。一昨日来の土砂降りのためにジョホール街道が崩壊し、通行止めだと告げられた。私は往時見学した所だが、他の人達には申し訳なく残念でならない。処置無しの体で、車をオーチャード通りのリット・タワーズに向かわせ、伊勢丹でのショッピングとなったのである。

デパートから見渡す市内は緑の樹木に覆われ、日本の都市に見られない自然美の財産である南国の利点を遺憾なく取り入れている。戦後、東南アジア最高の発展を遂げたシンガポールは、私の戦中のイメージを一掃してしまった。

16・00、ホテル玄関で記念撮影をして一路、高速道路を東進しチャンギ空港に到着。稀に見る絢爛豪華な空港ターミナルに驚異の眼をくり、19・00、GA967便にて帰路に就き、今次旅行を終えたのであった。

あとがき

「老いて病と相思る」。昨年は老いと病が一つになって押し寄せて來た。二回に及ぶ入院の病室の窓から外を眺め、杜甫の詩を痛切に感じたのである。

「白髮花の落つるを悲しみ、青雲鳥の飛ぶを羨やむ」

落花を見て自分の髪の白くなったことを悲しみ、又、青空を飛ぶ鳥を眺めては、むかし青雲の志を持っていた自分の現在を、はかなく感じたのであった。

心身ともに脱落して自分を空しく感じ、一時は失念して陶然自失に陥ってしまった。聖人であれば無為自然に帰り、座忘の境地としたであろう。座忘とは、いながらにして總てを忘れる事であり、これが人間の最高の境地なのである。

凡人の我々には到底、真似の出来るものではなく、憂いを忘れる余裕と趣味を持つべしと、仏ごころが高ぶって、インド、中国に続き、ボロブドゥル仏教遺跡へと導かれたのであった。

今次の旅を通じボロブドゥルを始めとして、バリ島の静かな自然回帰の空気と、神祕な環境にふれると、生を度外視している人間には死はなく、反対に、生に執着して我が生を生かそうとするから、むしろ生を失うのだと、教えられた感じがして來た。

岸に向かって高く上がった白波が、自然に崩れていくバリの光景を見つめて、一時は盛んであっても崩れてしまえば、其れで一巻の終わり、サーフィンも出来ないのだと、人生行路の教訓を表現するように見えたのである。

経済の超発展を遂げた日本から万水の路を越え、自然尊重を使命としたインドネシアに渡ると、大袈裟のようだが天命を知り、これを楽しむ心の構えが湧いてくるようである。勿論、私が悟ったというのではない。おのずから環境が尊くようような気がした。

この平穏な国に軍靴の音を響かせた戦いは、逆徳であり、千古から争いは世の末だ。

物換わり星移ったシンガポールは、依然として華僑天国である。中国本土の醜い権力闘争を横目に、「政は民を養うに在り」と中国先祖の教えを遵守し、大發展を成し遂げた偉大さは、「政を行なうのは人に在り」と教えていた。

帰国早々、読売新聞から「黄河」の写真が届いた。黄河の情むのを待っていたら、人間の寿命は尽きてしまうと、誰かが言った諺を想起した。旅は文化の母であり続けたい。

